

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「喜界町教育文化講演会」報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002436

「喜界町教育文化講演会」報告

(進行) …晴永教育長が開会のあいさつをいたします。

(教育長) …それでは、まず開会に当たりましてお礼を申し上げたいと思います。喜界島方言調査団の先生方が約33人おみえであります。1つは、当喜界島を調査の対象にいただきましたことに、まずお礼を申し上げたい。2つ目は、今日のこのシンポジウムは当初、予定になかったのですが、先生方、8日にいらして、今日までずっと調査、調査だったんですけど、お忙しい中、時間を割いていただいて、喜界島のためにシンポジウムを特別にセッティングしていただきました。このことに、木部先生はじめ、先生方にお礼を申し上げたいと思います。ウフクンデル。ありがとうございます。

今日のこの会は、いきさつを語りますと、昨年、鹿児島地域文化創造事業というのがありまして、この文化創造事業に今年の3月まで鹿児島大学の法文学部の学部長でした木部先生が指導助言に来ておられて、そして喜界島ブロックの指導助言をしていただいたんですが、喜界島の方言のユニークさ、それから小中学生が方言を受け継ごうとしている活動等に関心を持たれて、この調査団の調査をしていただいたということです。窓口は喜界町の生涯学習課、吉本課長をはじめ、文化担当の重野泰介社会指導員などと打ち合わせてきました。今日まで調査されて、明日お帰りですよ。約10日近くきていただきました。

島の方言が消えかかっております。私たちの年代以上の皆さんはしゃべれるわけですが、40代、50代もしゃべれるんですが、敬語が使えないとよく聞きますし、その下の年代は、聞いて分かるけれども、十分にしゃべれない。ましてや小中学生はやっと分かるぐらいだと伺っています。そういうことで、学校では方言大会、あるいは方言劇などの発表会をしたりして、そのほかに高齢者の皆さん方に方言を習う総合学習などを行っているところです。教育委員会としましては、3年ほど前から島ゆみた大会、それから島唄大会等を当時の生涯学習課に立ち上げていただいて、今につないでいるところです。

方言検証の問題点は、この後、シンポジウムでも出ると思うんですが、課題はどこにあるかという、やっぱり1つは、核家族化が進んで、祖父母と一緒に暮らさない家族が増えて、お父さん、お母さんが共通語でしゃべるので、小中学生が方言に触れる機会がなくなったこと。もう1つは、マスメディア、テレビ文化がこんなに盛んになって、朝から晩まで東京弁、共通語を聞いている、そのことで、物を考えるのに共通語で考える。たぶん私より上の世代は、方言、微妙な言い回し、それで考えて情が伝わっている、そういうことが薄れつつある、こういうことかなと思っております。

おとといの土曜日、湾集落の調査団の調査をちょっとのぞかせていただきましたが、高性能ピンマイクをこうセットして、そして聞き取り調査に協力しておられる島の高齢者の皆さんに、これは何と言いますか、例えば「くわ」のことを「クエ」と言いますが、も

う 1 回お願いしますと、2 度、3 度録音しておられました。このようにして、消えかかっている島の言葉が記録として後世に残されるのはすごいことだと思いました。今年中に冊子も刊行されると伺っております。非常に厳密な調査をしておられて、学問というのは厳しいなということをおぼろげに思いました。

最後に、私は土曜日、湾校区の高齢者学級での木部先生の講演を拝聴しに行きまして、すごく感動したことがあるんですが、その中身をあんまり詳しく語ると、今日のシンポジウムに出るんですかね、先生。出ませんか。じゃあ、その話をぜひ木部先生にさせていただきたいんですが、こんなに小さな島に 950 年ごろ使われていた言葉がある集落で残っている。また隣の集落では同じ言葉が別の表現で残っている。これは平安時代のことだと。そして、私の荒木では、使っている言葉は 1570 年ごろ、戦国時代のちょっと前ぐらいの言葉が残っていると。それらは当時の文献、歴史を載せた書物の中に残っている、そういう研究の成果を湾校区で語っておられました。

小さな島に、同じ 1 つの単語が別々の発音で残っているということはすごいなと思いましたし、その不思議さにも胸を打たれました。私の明治生まれの祖父が、我が島は大和言葉が残っていてすごい島であるというふうに、小学生の私に言ったことが思い出されて、いたく感動したところです。このことに後で木部先生、ぜひ触れていただきたいんですが、よろしくをお願いします。

小さな島でありながら、このように集落、集落で発音が違う、アクセントが違う、イントネーションが違う、これはすごい宝だと思っています。何とかして後世に残せたらなと思っています。言葉というのは、生活の中からはじんできますし、また生活が言葉を規定するというか、そういう双方向の関係があると思っていますが、今日のシンポジウムの中でもそういうことが明かされていくのかなと思っています。

本当に今日はホールいっぱいの町民の皆さんにおいでいただいて、担当した生涯学習課の皆さんも満足しているんじゃないかなと思います。それでは、先生方、よろしくをお願いします。本当に今日はありがとうございます。

(進行) それでは早速ですけれども、パネリストの先生方、司会の木部先生、ご登壇をお願いします。この事業のチームリーダーであります国立国語研究所の副所長の木部暢子先生、司会進行をよろしくお願いします。

(司会) 皆さん、こんばんは。今日はこんなにたくさんの方が来てくださりまして、ありがとうございます。私どもは 9 月 9 日に参りまして、10 日から今日の午前中まで、9 つの地区にお邪魔しましたが、そこに来てくださった方も今日たくさんいらっしやってくださいました。ありがとうございます。普段なら、この時間はだいたい家でゆっくりテレビを見ながら晩ご飯、あるいは男の方は晩酌でも、晩酌はダレヤメとこちらでは言うんですか、ダレヤメの時間ではないかと思っておりますけれども、本当にありがとうございます。

国立国語研究所は、昭和 23 年にできた研究所です。戦後間もなくです。国語、日本語を研究する部署として設立され、それからずっと日本語の研究をやってきました。日本語

は共通語だけではありませんから、これまでも国立国語研究所は方言の調査をたくさんやってきました。全国地図を作ったりもしておりますし、重要なポイント、ポイントになる地点の調査も今までいくつか行ってあります。

去年の10月に国立国語研究所はリニューアルしまして、もう少し研究に重点を置こうということになりました。今、これだけ世界がグローバル化しますと、世界の情報もどんどん入ってくる、それから経済の力で世の中が動いていくということが多いですね。それに対して、やっぱり文化は経済と同じぐらい大事ですので、その流れの中で、日本の文化、日本の言葉ももっと真剣に取り組まなければいけないということがありまして、もう少し日本語の研究に力を入れて、これを、日本の国内だけではなくて、もっと諸外国にもアピールしていこうという方向性でリニューアルしました。

研究所の中には、いろいろなセクションがあって、いろいろなプロジェクトをやっています。方言のプロジェクトも大きな柱です。方言の調査は昭和23年以来、国立国語研究所が取り組んできたテーマの1つですが、中でも、特に南方の奄美、沖縄、それから東京都の八丈、それとアイヌ語、このようなものがユネスコで消滅の危機の度合いが高い言語として挙げられておりますので、こういうものに重点的に取り組みたいというので、特別プロジェクトを作りました。それが私がプロジェクトリーダーをしている消滅の危機にある方言を保存しようというプロジェクトです。

しかし、考えてみたら、日本中の方言が危機に瀕していると思います。事情は東北も同じですし、本州のいろいろな地域でも方言が消滅しつつあります。私は今年の3月まで鹿児島大学にいらしまして、南の方の方言を自分が今までやってきたことという経緯もありますけれども、日本語の中でもとても重要だと思っております。それで、奄美、沖縄の方言を担当することになりました。

そのときに、研究者が一人一人で行くのではなくて、複数の研究者が1つのところに行って、何かみんなで意見交換しながら調査をしたい、その地域の記録をしたいと思ったんです。それで今回、第1回目の試みとして喜界島に参りました。これから順番に4人のパネリストに発言してもらい、最後にディスカッションを行い、できれば来てくださった皆様、調査に実際に協力してくださった方がたくさんいらしていますので、そういう方からのご質問やご意見を受けて、みんなでディスカッションしたいと思っております。

それでは、よろしく申し上げます。順序は、最初にトマ・ペラールさん、2番目に新永さん、それから3番目に狩俣先生、4番目に松本先生という順序でいきたいと思っております。それぞれ自己紹介も兼ねながら、今回の調査で感じたこと、あるいは普段、自分がやっていらっしやることも絡めて話していただければと思います。

最初にトマさん、よろしく申し上げます。

古い部分と新しい部分

(トマ) 皆さん、こんばんは。1週間、お忙しい中、方言を教えていただきまして、本当にありがとうございました。大変勉強になりました。簡単に自己紹介させていただきます

と、僕は生まれも育ちもフランスで、去年、博士課程を終わりました、今、京都大学で研究員をやらせていただいております。今まで沖縄県の宮古島という南の島の方言の調査をしてきましたが、今回初めて喜界島に来て、この方言の調査に参加させていただいて、本当にいろいろ勉強になりました。

僕は、特に言葉の歴史に興味があって、先ほどの教育長のお話にありましたように、この喜界島の方言に古い言葉が残っています。いろいろ調べた中で、いくつか確かに教育長さんがおっしゃったように、昔の文献に現れていて、今の標準語や本土の方言でなかなか使われていない、なくなってしまった単語がたくさんありました。いくつか例を挙げますと、例えば「イモ」のことは標準語でもいろいろな方言でも「イモ」ですけれども、こちらの喜界島ではタイモなどのことを「ウム」と言いますよね。これは、『万葉集』などの文献を見ると、「イモ」ではなく「ウモ」という形が出ています。喜界島と同じですね。そう考えると、標準語の方が変わってしまったので、実は標準語の方が「なまって」います。また、貝の種類を指す「ミニャ」という言葉が喜界の方言にありますね。これも昔の文献に「ミナ」という単語がありますが、標準語にないです。もうなくなった言葉です。次に夢のことを標準語では「ユメ」と言いますが、喜界島では「イミ」ですね。これも昔の文献では「イメ」となっていないです。これも標準語が「なまった」のです。また、奥さんのことを「トゥジ」とか言いますが、これも『万葉集』などに「トジ」（刀自）という言葉があります。これもおそらく今本土のどこでも使われていない言葉だと思います。それに発音にも古い特徴が見られます。例えば葉っぱのことを喜界島では「ファー」や「パー」と言いますが、これも明らかに古い特徴です。そこも標準語がなまって元の「パ」が「ハ」となっていました。

発音や単語の面で古い特徴が喜界島方言にたくさん見られますが、他方では変化によって新しくできたものもたくさんあります。主に発音のことをずっと1週間調べましたが、世界のいろいろな言葉を見ても、なかなか他にない、めずらしい特徴が喜界島の方言にあります。例えば我々が大変苦労した「ニィ」と「ヌィ」、「タ」と「ッタ」、「ク」と「ック」などの区別は一部の方言には見られましたが、めずらしくてかつ難しいと思いました。あとは、「パ」でも「ハ」でもなく、「ファ」に近い音を何十回も試しに発音しても方言を教えてくださいました方に「違う」と言われて、大変苦労しました。

教育長の話にもありましたが、方言をどうやって残せばいいのかという問題が難しいです。フランスでは方言がほとんどなくなってしまっています。フランスでも日本と同じく「方言札」のようなものが昔あって、学校で非常に教育が厳しかった結果、方言がなくなっていきます。限られた地方にしか方言が残っていませんが、どうやって残してきたかといいますと、まずは学校の教育はその土地の言葉で行われています。つまり先生が標準語ではなく方言で子供に教えています。それに1時間とかの短い番組ではなくて、朝から夜までずっと方言だけのラジオがあって、方言のテレビ番組もあります。そうすると方言がうまく残ると思います。それは理想で、同じようなことを日本でやるのは難しいかもしれませんが、方言を残す有力な方法です。

ほかの研究者を代表して、この一週間勉強させていただきまして、ありがとうございます

した。いろいろ面白いことが勉強できて、貴重な方言を生で聞けて、大変面よかったと思います。僕は個人的にまた来るとお思いますので、その時宜しくお願ひします。どうもありがとうございました。(拍手)

地域間の違い

(新永) こんばんは。まずこんな遅い時間帯にこの場に皆さんにお集まりいただいたことに対して、本当に心から感謝いたします。私は、生まれも育ちも神奈川県相模原市というところなんですが、大学は東京大学に通ってまして、そこで言語学というか、方言を中心に勉強しています。

私の調査している方言は、お隣の奄美大島の宇検村という村の、さらに湯湾という集落の方言で、普段はそちらを中心に研究をしています。今回は喜界島に来られるという本当に貴重な機会にめぐりあえましたので、メンバーと一緒に色々と勉強させていただきました。

今回、私が所属したグループでは、喜界島の小野津と志戸桶、上嘉鉄、中里、荒木の5集落の方にいろいろと方言について教わりました。そこで、せっかく私が奄美大島、宇検村の方言をやっていますので、まず最初に、大島とこちらの喜界島の5カ所の地域との間で気付いた違いと共通点というのを少しお話しさせてください。

まず1つ目に気付いたことですが、大島の宇検村の方言もこちらの喜界島の方言も、自分のことを「ワン」と言いますよね。しかし、「私」と言うだけでは「ワン」なんですが、例えば「私は」というふうになんか言葉をつなげると、大島と喜界島では少し違いが出てくるということに気付きました。今回は喜界島の5カ所の地域に住んでいる方々に方言を教えてくださいました。みなさんは、言ってみれば私にとって喜界島の方言の先生です。これら私が生徒として文をちょっと発音しますので、先生であるみなさんはどうかビシバシと採点してください。

まず1つ目は小野津の方言です。「私はタコの刺し身が食べたい」という文を小野津の方言でどう言いますかと聞いたら、「ワノー トーヌ サシミガ カンプサイ」というふうに教えてくださいました。面白いのは、最初の「私は」のところ。「私」だけで聞いたときには「ワン」と言っていたのに、「私は」と聞いた途端に、「ワノー」となりますね。大島の宇検村ではどう言うかといいますと、例えば今の文は、「ワンナ トーヌ サシミガ カンチャサ」というふうになります。つまり、「私は」の部分は、大島の宇検村の方では「ワンナ」ですが、喜界島の方では「ワノー」となるんです。そこで私は、ああ、こんなに、目で見えるくらいに近い距離にある大島と喜界島でもこんな違いがあるんだと驚きました。

さらに、もう1つ違いがありまして、例えば話し相手を指す場合、「あなた」とか「お前」という言葉がありますが、例えば同い年や年下に対しては、こちらの喜界島では「ダ」または「ダー」と言いますね。ですが、これは大島の宇検村だと「ウラ」と言うんですね。全然形が違うなど。目上の人に対しては、もちろん「ダ」とか「ダー」という言葉は失礼

なので、じゃあ、どう言いますかと聞いたら、目上の方に対しては「ナーミ」（志戸桶では「ナーメ）」というふうに教えていただきました。これも宇検村では「ナン」というふうに少し短くなります。

そこで、「お前」というのを含んだ文を、今度は志戸桶で教えていただきました。「お前はその魚の名前を知っているか」という文ですが、これを志戸桶では「ダヤ ウン イユヌ ナーヤ シッチュンニャ」と言う。最初は「ダ」になりますね。例えばこれが大島の宇検村だと、「ウラ」を使って、「ウロー ウン ッユヌ ナーヤ シッチュンニャ」というふうになります（大島宇検村では、「お前」は「ウラ」ですが、「お前は」は「ウロー」になります）。

ということで、大島と喜界島は本当に見えるくらいの距離なのに、こんな違いがあるんだということにびっくりしたんですが、でもよくよく調べたら、喜界島内部でも、同じことだけではなくて、違いもあるんだなということに気がきました。そこで、本当に少ないのですが、気付いたこ違いを1つ挙げます。例えば「いらない」という表現がありますが、これは例えば小野津だと「イヤー」というふうに、あとは中里と荒木だったら「イラー」となりますね。最後は「イラー」「イヤー」と伸びると教わりました。しかし、志戸桶と上嘉鉄だと「イラン」になると教わりました。これは、もしかしたら、まだ私の調査不足の可能性もあります。とにかく、最後が「イラー」「イヤー」と伸びる地域と、「イラン」のようにと伸びない地域があるのだと驚きました。これはそれぞれの地域ごとの違いなのか、同じ地域でも2つの言い方があるのか、といったようなことは今後調べなければいけないことだと思います。

試しに、「酒さえあれば何もいらない」という文章を上嘉鉄で教えていただいたところ、「セーセー アリバ ヌーム イラン」となる。最後は、「イラン」になると私は聞きました。しかし、荒木だと「セーセーカ アリバ ヌーム イラー」というふうに、最後が「イラー」というふうに伸びて、ああ、ちょっと違うのかなと思ったんですね。

最後に、特に驚いたことが1つありました。それは、動物に関する方言です。例えばカラスを表す方言は、喜界島のどこでも「ガラサー」という。でも、それがカラスとかじゃなくて、猫になった途端に、地域によって色々な言い方があるということを教えていただきました。例えば小野津と志戸桶だと「マヤー」なのに、上嘉鉄と中里と荒木だったら「グルー」となる。まったく違うなど。

これに関して、「食べて寝るだけなら犬や猫と同じだ」という文を中里の方に教えていただきましたら、「タディ ニットゥ ダキナリバ、インガーヤ グルートゥ イッスジャ」となる。このとき、中里の方に教えていただいて一番驚いたことなんですが、「猫」を「グルー」というのは他の地域でも聞いていたので特に驚きはしませんでした。じゃあ、代わりに「ネズミ」を何と言うんですかと中里の方に聞いたら、「マヤー」と言うと聞いて、びっくりしました。つまり、小野津と志戸桶では「マヤー」は猫を指しているのに、中里ではネズミを指すんだということにちょっと驚きました。ちなみに大島の宇検村だと、猫のことは「ミヤー」といいます。何となく猫の鳴き声に似ている感じがしますね。「ミヤー」とか、あと「グルー」というのも、何となくゴロゴロしているような声、何となくそういう猫の鳴き声に似ているなどと思ったんですけど、どう考えてもネズミがマヤーと鳴くとは思えな

いので、これはどういうことかなと思いました。でもネズミというと、やっぱり猫、猫といえばネズミというようなことが思い浮かびます。つまり、猫とネズミはいつも一緒になっている気がします。

何か思い浮かべるときにいつも一緒になるもの同士言葉が入れ替わるということは結構あります。例えば最近の例ですと、トリノ五輪の金メダリストの荒川静香選手がやった得意技にイナバウアーという技があるのをご存じかもしれませんが、あのイナバウアーという技は、実は体を反って曲げる上半身の形のことを言うのではなくて、下半身の脚の形（演技をするときに足を開いて、つま先を横に広げて、横に滑る）を本来はイナバウアーと言うんです。しかし、皆さんはやっぱり反った上半身の形に目が向くので、そっちをイナバウアーと呼んでしまいますよね。つまり、いつもペアにあるもの、この場合ですと上半身と下半身ですが、下半身をイナバウアーと呼んでいたのに、上半身の方が目立つから、そっちをイナバウアーと呼んでしまうというようなことがある。

だから、ネズミと猫がいつも一緒について、「マヤー」と言っていたのに、ああ、ネズミの方を「マヤー」と言っているのかな、と考えるのも、もしかしたらあり得るかもしれませんね。でも、これは本当にそれが理由なのか分かりませんが、でもそういうこともあってもおかしくないと思いました。

ということで、今回は結局ほんのさわりしか分かってないので、少しだけなんですけど、大島と喜界島の方言の違い、そして喜界島内部の違いに色々気づくことが出来て、本当にすごく勉強になりました。また今度来たときに、いろいろ教えていただければ幸いです。どうもありがとうございました。（拍手）

沖縄のことばと似ている

（狩俣）ワノー（私は） 沖縄カラ ッチャ（来た）、琉球大学ヌ 狩俣です。キャーシマユミタ ワーチャニ セーチャボーチ ウフクンデータ（喜界島言葉を私たちに教えて下さりありがとうございました）。私は 27 年前にも来ました。そのときには、佐手久と志戸桶と中里と川嶺を調査しました。27 年ぶりの調査だったんですが、昔と変わらず方言を教えてくださいまして、本当にありがとうございました。

沖縄の方言と喜界の方言はよく似ています。奄美大島、徳之島の方言よりも、喜界島の方言の方がよく似ていて、先ほどの教育長さんのあいさつも理解できました。どのくらい似ているか、調査したものの中からいくつか紹介します。例えば今回調査したものの中に「飛行機は 1 日に 1 回しかない」という例文があるんですが、これを沖縄の方言で言います。「ヒコーケー ヒッチーニ イッカイシカ ネーン」。「空港ならこっちの道を行きなさい」、今帰仁の方言で言うと、「クーコーカチャー クマヌ ミチ イキミソーリ」。そっくりですね。「その傘は俺の傘だ」、「ウン ハサー、ワーヌジャ」。今帰仁方言では「傘」のことは「ハサ」です。「肩」を「ハタ」、「鼻」を「パナ」、それから「手」を「ティー」、「目」を「ミー」、「毛」を「キー」と言います。そっくりです。もちろん違うものもあります。お父さんのことを「ツチャーチャー」と言いますし、おばあさんのことを「パーパー」と言います。

27年前に来たとき、島を1周するバスに乗っていましたが、前の席におばあちゃんが二人座っておしゃべりをしているんですが、何と言っているか、7割か8割ぐらい分かります。初めて来た島の言葉なのによく分かるので、すごいなと思いました。皆さんも沖縄にいらっしゃったら方言を聞いてみてください。特に大宜味村とか国頭村とか今帰仁村あたりへ行くと、とてもよく似ていることが分かります。

私の恩師の仲宗根政善先生は今帰仁のご出身だったんですが、沖永良部島などに行ったりとか、喜界島の方言を聞いたりして、よく似ているというんです。長い調査で滞在していても、ホームシックにならないというようなことを言っていました。それぐらい似ています。

沖永良部、与論が沖縄に近いというのは分かるんですが、徳之島と加計呂麻島と奄美大島を飛ばして、喜界が沖縄に似ているというのが不思議です。何でなんだろうというのが長年のなぞです。こちらで最近発見された城久遺跡から、北の鹿児島とか本土の方と交流した人たちがここで何か大きな文化を持っていて、交流の中心地になっていたと思うんですけども、その人たちが南に行って、沖縄とか沖永良部とかに行っただけかなと考えるんです。弥生時代以降、琉球列島という地域がどんなふうに分断されてきたのか。それを調べるには、考古学の遺跡を調査して、交流の跡を調べるということも可能なんですけれども、実は言葉の面から、例えば今言ったみたいに沖縄の言葉と喜界の言葉が似ている、どこが似ていて、どこが違っているかということによって、もしかすると喜界島で繁栄した人たちが子孫を増やして、沖縄まで広がったんじゃないのかということが確認できるかもしれません。言葉というのは、大切な要素なんです。

私は奄美にもずいぶん行きましたし、徳之島も沖永良部も与論も調査をしているんです。今回も、「あれっ、これって沖縄と同じだな」という表現をたくさん見つけたんです。お昼ご飯のことを「アシー」と言いますね。沖縄でも「アシ」と言うんです。

それから、沖縄と似ているもう1つは、「花」のことを、例えば小野津、志戸桶とかは「パナ」と言いますし、城久とか花良治とか浦原とかでは「ファナ」と言いますね。それから、上嘉鉄とか中里とか湾とかに行くと「ハナ」と言うんですね。同じ島の中に「パナ」と「ファナ」と「ハナ」があるんです。実は沖縄の今帰仁村とか名護市は「パナ」と言うんです。大宜味村や伊平屋島に行くと「ファナ」と言うんです。そして国頭村や恩納村に行くと「ハナ」と言うんです。同じ島の、狭い地域の中に「パナ」と「ファナ」と「ハナ」というのがあるというのも、喜界と沖縄も同じなんです。

どうしてこういうことが似ているんだろうというのがすごく不思議で、面白い。これってどうしてなんだろう、昔の人たちはどういう生活をしていたのか、島を越えてどんな交流をしたのか、その交流の跡が言葉のどこかに残っているんじゃないかということを考えてながら楽しく調査をしています。我々が皆さんに同じことを何回も聞いたりとんちんかんなことを聞いたりするのを、辛抱強く答えてもらっていますが、その成果は何か形にして残していきたいと思っています。

私の話はここで。何かご質問とかがありましたら後でお願いします。(拍手)

長年の方言調査の経験から

(松本) こんばんは。千葉大学に元勤めておりまして、今は、去年の4月からは年金生活をしております。松本と申します。

喜界島には昭和46年、沖縄復帰の1年前ですけれども、初めて参りまして、それから断続的に何回か来ております。去年も、ちょうど9月の今よりちょっと早い時期ぐらいに参りまして、いろいろ教わりました。今回は、これだけ地点を回ったのは初めてで、大変疲れました。それで、この成果を今日報告するということなんですが、まだいろいろ記録を整理するのに精一杯で、まだそこまではなかなかいきません。調査の合間の話が、無駄話どころか大変いろいろ参考になることが出てきて、面白かったです。何か昔は方言を使うのを禁止されていた。方言を使って、何かお掃除なんかの罰当番をさせられたことがあったというようなことを話してくださった方もいらっしゃいました。さらに、そういうはなしの中に、方言札を掛けさせられたというのがあると思うんですが、その方言札なんていうこと自体も、嫌な経験でしょうけども、まだそういう経験をお持ちの方がいらっしゃるうちに記録しておく必要があると思うんですが、そういうふうな時代を耐え抜いた島ユミタというのが、大変健在だと思うんですが、島の人の中での方言差への敏感さというのも、いろいろなどころで見られたような気がします。

これは帰ってまたもう1回整理するのを楽しみにしているんですけども、例えば「何々なので」というような、原因とか理由を表すような言い方は、いろいろ出てきまして、「荷物が重かったの」とかあって、「ニーガ ウブサタンカラニ」というような、そういうのがあったんですが、それはどこか調べている中に、「ニーガ ウブサンナティ」という形も出てきたんです。これはどうですかと聞きましたら、あっ、それは遠くのシマのことばだとかですね、ワチャシマ（うちの集落）では使わないというようなお答えが返ってくる集落がありました。これはやっぱり島の中でそういう違いというのをちゃんと自覚しておられるわけですね。

しかし、そういうことをご本人たちも気付かない違いをずっとそのままにいるということもあるということで、今回ではないんですが、私、体験しております。私がよく勉強させてもらったのは、島の真ん中辺の大朝戸、ウィンサトという集落の言葉なんですけれども、あそこはチニューとタナーとノーマという3つの小字に分かれているんですが、その小字出身が違う方たちが、スカ、急須とか土瓶ですか、スカの注ぎ口、あそこを何と云うかということで、70歳を過ぎたおじいさんたちですが、大激論しました。片方の方は「スカンティー'ジャ」、片方の方は「スカンビー'ジャ」。それで、お互いにそれまで、すぐ近く、隣ですよ、1つの字の小字ですから。でも、こういう言い方をしている人は知らないとお互いに、そんな言い方はないと。「フィー」とか「ピー」とかというのはよくない感じがありますね。それで、たぶんそれを避けて、「ティー」にしたんだと思うんですけど、名字の「樋口」の「樋」なんていう字は、あれは「トイ（<ト・ヒ）」でもあって「ヒ」でもあって、もともと「ヒ」だったのが、「トイ」になった。それで、その「トイ」が「ティ

一」になった。それから、「スカンビー」の「ビー」の方は「ヒ」の形が残っているというわけです。

ですから、たぶん「ビー」の方が古くて、「スカンビー」の方が古くて、「ビー」というのが音感が悪い、何かを連想するようですから、それで「スカンティー」になったということだろうとっております。これは中の方も気が付いてないようですけども、お互いに気が付いている違い、まったく気が付かない違い、そういうものを抱え込んでいる。それほど大きくない島でもいろいろな違いを。それもやがてはなくなると思うんですけども、なくならないうちに記録しておくということが、トマさんがおっしゃった日本語の歴史、歴史に興味がある、その歴史を組み立てていくときに、つながらないところをつなぐ、そういう輪っかになる可能性がある。そういうものがいっぱい、この島にはあると思われるわけです。

私も、そういうことで、1971年からずっと来ておまして、なかなか切り上げられないでいるわけですけども、そういう島の言葉はどんなふうに研究されてきたかという、喜界島ではどうしても1人名前を出さなくちゃいけない方がいて、それは阿伝に今、顕彰碑が建っていますけれども、阿伝出身の岩倉市郎さんです。岩倉さんの『喜界島方言集』というのが主著なんですが、図書館にも当然あると思いますから、またご覧になってください。復刻版で新しいのが1975年ぐらいに出ているので、これは初版です。昭和16年の7月か8月に出ている。

この岩倉さんの方言集は、そのころ出たものとしてはとても優秀で、特に音声的な表記などがしっかりしている。あと、怪しげな憶測はしていないわけなんです。ですから、これを読むと、たぶん皆さんも、こういうふうなことだと何となく聞いていたことなどに、また新しい知見が入って、ああ、そうなのかなというものが絶対あると思います。例えば「ハットゥー」なんていう言葉が島にありますね。帽子のことを「ハットゥー」。それで、英語のハットの関係から、それからじゃなんていうことをよく聞かされたりするんですけども、この『喜界島方言集』ですと、「ハットゥー」というのは、「かぶと」じゃないかと。「かぶと」、最初のk音がhに変わるというのは、いろいろなところでおこっています。これは、可能性とすると、大変いい目の付けどころだと思いますけれども、そういうこともさりげなく書いてあるもんです。

それから、この岩倉さんは、耳のよさを活用いたしまして、沖永良部に採集に行っている。それで沖永良部の昔話を、今までのものでもやっぱり一番いいものを作っていると思うんですが、そこの中に、5話ほど岩倉さんたちがたぶん教わった、沖縄出身の伊波普猷という大先生ですね、その伊波普猷の使ったローマ字と同じ書き方で、沖永良部の昔話を語りどおりに書いているんです。私はそれを読んでから沖永良部にも行きました。そのときに和泊町役場に行って、1階の職員の方に、こういう言い方はしますかと言ったら、うん、そんなの聞かんよとか、何か間違いじゃない、とかと。1人、職員の方が、今、2階に、町史の編纂で、おじいちゃんたち、高齢者が集まっているから、そっちへ行って聞いてみると言われて、2階へ行って聞いたら、ちょっと考えたりしましたけど、ああ、それは昔使ったよという方が出てきました。

ですから、岩倉さんの、よその島へ行っても正確な書き方をしているんですね。ただ、正確であることを確認できるのは今のうちで、そうでないと、ああ、岩倉さん、間違っ
て書いているんだということになってしまう。みんなに忘れられたら、ある単語が、それが
もう間違いにされちゃうわけですから、ですから今までに出ていた記録などでも、やっぱ
りそれにもう一度目を通して、ああ、確かにこの通りだった、できればそれをまた音声で
も記録して保存しておけたら、これからのいろいろな研究に役立ってくるんじゃないかと
いう気がします。

なぜそれだけ喜界島方言というのは研究の値打ちがあるかというのは、先ほど申しまし
たように、日本語の歴史というものを解明するときに非常に役に立つ。方言の掛け替えの
なさというのは、自分の母語としての方言というのはみんな誰にとっても同じなんです。
だから、皆さんにとっての喜界島方言というのは、私は埼玉県秩父の出身ですけど、や
っぱり私にとっての秩父方言と同じで、私にとって秩父方言というのは、何か粗っぽく聞
こえますけれども、やっぱり掛け替えのない方言です。

ところが、悔しいですけれども、歴史的なことを解明する資料としては、喜界島方言には
遠く及ばない。私も、自分の秩父の方言もちゃんといろいろと記録しておきたいという気
持ちはあるんですけれども、それより先に、もう40年近く前でしょうか、1971年だから
ね、手を付けた喜界島方言の方をやっぱりちゃんとまとめなくてはという気持ちで、断続
的ですけども、通っているわけです。

喜界島方言の琉球方言の中での位置付けということは、先ほど狩俣先生もそういうこと
に触れられたと思うんですけど、例えば今回の調査で見ましたが、ガ行の鼻濁音、助詞
の「が」というときに、「何々が」というと、鼻濁音がちゃんと出ますね。九州本土はこれ
はありませんよね、もともとね。私も関東ですけども、関東でも上州、群馬県から埼玉、
それから新潟県、あの辺はずっと無いところなんです。だから、私も自分の使用している音声
としてはガ行鼻濁音はありません。島に来ると、それがちゃんと聞こえて、ああ、この島
の人の発音はきれいだねなんて思いますが、島の方も、普通語をしゃべるときには、私な
んかと同じ、あと九州本土と同じ硬い「ガ」を使っていますが、あれはやっぱり使い分け
はだんだん難しく、聞かなくなるかもしれないね。だいぶ以前よりは硬い「ガ」が出て
きて、それで発音するというのも増えてきましたが、助詞の「が」などは、やっぱりそ
れほど侵されていない。残っているような感じがしました。

この「ガ」の発音というのは、喜界島にあって、それから琉球方言地域では、ずっと離
れた、台湾の見える与那国島、あそこに残っている。こういう残り方は何かというと、周
圍分布とかそういう言い方を、柳田國男さんという民俗学の日本の第一人者がしています。
周圍分布しているというのは、古いものなんだということがある。

これは明らかにそういう古いものが残っているという例なんですけれども、非常に冒険
的な例としては、例えばこういうこともその周圍分布の中で考えると面白いと思うんです
が、これは地名なんですけれども、今お話しした与那国島や、それからその隣の西表に祖
納という地名があります。これは沖縄出身で、もう亡くなった中本正智さんは、アイヌ語
と関係があるんじゃないかと。アイヌは、向こうで幌内とか何とかナイとか、川とか流れ

とか、そういうのを表す言葉として「ナイ」が付く言葉がいっぱいありますね。日本では東北地方にもすでに見られます。

この喜界島にまいりますと、「ナイ」というのは、「サンニエー」(先内)、それから、先ほど申しましたけれども、ウィンサトの中ですが、チニエーがありますね。ウィンサトのところは、あそこはウッカーという川があって、泉がわいていて、水がありますね。そうしますと、これは先ほどのお話ししたガ行鼻濁音の分布と同じ、一番端っこ端っこに残っている。これもその圏分布として説明できるんだったら、もともとは日本語の1つとしての琉球方言がここで使われる前はアイヌ語がずっと全体で使われていたという可能性はあるんじゃないか。こんなことを、これは証明するのは難しいかもしれませんが、ただ、片一方で、中本さんが、「ソナイ」というのはアイヌ語系じゃと、何かそうおっしゃっている。

喜界島の方にもそういう「ナイ」の付く地名があるぞということを、それはどのぐらいご存じだったか分かりませんが、島を先ほどの小字名とかそういう中に地籍簿を探してもない地名も残っているということを奄美大島で聞きました。ここでもそういうようなことはあるんじゃないかと思しますので、いろいろな地名なども保存して、今後の研究にそれを役立てていったらよろしいんじゃないかというふうに思います。

いろいろとまだお話しすることはあるんですが、1つ、方言がなくなってしまうようにするためにはどうしたらいいかということをし、トマさん、やられていると思うんですが、私は奄美大島にもよく行ってまして、こちらより多いぐらいかもしれませんが、例えばやっぱり子供のうちは、教育長の晴永さんが最初におっしゃった敬語、敬語を使わないで、普通体で大人とも話して、ある年齢になったときに、敬語を使う。けども、昔でもやっぱり家庭によっては父親、母親が子供に敬語をそんなに教えない、もっと緩やかに、普通の話しかたでしていたという家庭もあったようです。

そうすると、逆の家庭もあると思いますから、そういうところがあった。あとは、誰々さんのところは子供なのに大人言葉を使っているなんて、笑ったようなんですけど、例えば、最近の若いのは敬語を使イキランとか、そういうようなことで、あまり厳格に言葉のことをいたしますと、委縮して使わなくなって、何を使うようになるかと、そんなに言われるんだしたら、もう普通語でしゃべったほうがいと、標準語でしゃべってやれというようなことになりまして、かえって自分で自分の首を絞めることになったりするわけで、方言を残すには、敬語だけじゃありませんけれども、よう方言使ったねということで、これは褒めてあげる。教育の一番根本と同じで、やっぱり褒めて、子供がみんな使う、そういう雰囲気を作る。間違いだとか、いちいち言わないようにするということがいいんじゃないかと私は考えております。

いくつかまだ話したいことはあるんですけども、時間もちょうど来たようですから、私はこれで。どうもありがとうございました。(拍手)

方言を残す

(司会) 4人の方が共通して述べたのは、やっぱり古いものが残っている可能性がたくさんある。でも一方で、トマさんがおっしゃったように、新しく変化している部分もある。重要なのは、いろいろな違いがあるということですね。島の中でも、北部の方は「パナ」だったり、中部は「ファナ」だったり、南部の方は「ハナ」だったり、違いがあるということは、なぜこんな違いができたのか、私たちは歴史を考えたくなるわけですが、やっぱりそこがとても大事だと思います。

古いものを残している部分、それから、新しい変化を起こしている部分、どこからどう変化したのかを推理していくということです。トマさんは、共通語がなままっているとおっしゃいましたが、本当にそう思います。共通語の方がどんどん変化している部分がある。だけど、島の方が逆にどんどん変化している部分も一方ではあります。私たちは、そういうことを見ることで、「言葉ってこういうふうにして変化していくんだ」という興味を抱くわけです。

ただ、一方で、私もいろいろなところに調査に行って、いつも内心忸怩たるものがあります。私たちは、言葉ってこうしてこうやって変わっていくんだということが知りたくて、それが楽しくて、さっきも狩俣先生が楽しいとおっしゃいましたが、言葉を調べているんですけれども、でも言ってみたら、よそ者なんです、私たちは。やっぱり言葉を使って残していかれるのは地元の方なので、地元の方との協力関係を持って、そしてすべてを書き写すことはできませんから、やっぱり地元の方たちと協力しながら、できるだけたくさんものを残していきたいと思います。

今はとてもいい録音機ができて、簡単に操作できる録音機がかなり安くなりました。今回もできるだけ生の言葉の発音を残したいと思って、録音したりビデオに撮ったりしています。私たちは1年のうち、本当に何日間か来るだけですけれども、地元の方と協力して、地元の方ができるだけたくさん資料を次の世代に残していただければと思うんですね。でも、一番いいのは、記録の形じゃなくて、日常話す形で、次の世代にどんどん伝えていくことだと思います。そのことは松本先生が今おっしゃいました。

ところで、トマさん、フランスでも方言札のようなものがさっきあったとおっしゃっていましたね。それは、私は知らなかったもので、ちょっとその話を教えていただけませんか。フランスの方言札ですか。喜界では首から提げるようなものだったんですが、フランスではどういうものを。

(トマ) 帽子だったそうです。

(司会) 帽子？

(トマ) はい。変な帽子を被らせられていました。

(司会) それは、学校で1日中？

(トマ) そうです。

(司会) あっ、お前、しゃべったというと、その子に帽子をかぶせて、学校、1日終わる

までかぶっているんですか。

(トマ) はい。

(司会) それはこちらの方言札と似ていますか。

(トマ) はい。

(司会) シャベった人に、はいとかぶせて、学校が終わるまでずっとかぶせられたんですか。やっぱり。帽子というところがフランス的というか、おしゃれですね、ちょっとね。

それから、今回の調査でも、また、以前にも、こういうものを送っていただいたことがあるんですけど。手書きで書かれた方言集です。最近は、ワープロをご自分で打つ方もいらっしゃるんですが、これは手書きで、びっちりノートに書かれたものです。コピーさせていただいたものなんですけども。それから、これは先日、図書館でいただいた、佐手久の方言集です。これには CD も付いているんだそうです。それから、これは、もうこの方は亡くなられたそうですが、塩道の方言集。これも手書きですね。

こういうものを書いていらっしゃる方、本当に私は頭が下がる思いです。私たちにはとてもこんなものは書けません。地元の、できるだけたくさんの方が、「あっ、思い出した」と、ちょこちょこっと方言を書き写す、それで結構ですので、そういうことをやっていただけたらなあ、私たちはそういうことのお手伝いができたらなと思っています。

それから、方言を残すということで、何かありませんか。

(狩俣) 方言をどうやって残していくかというとき、学校の生徒に方言大会とかお話し大会とか、方言の芝居とかというのがありますが、親もまったく話せないですよ。ですから、そのとき、親も一緒に PTA の主張とか、お父さんの主張とかお母さんの主張とか、20 代から 30 代、40 代、50 代の人もしょに方言大会をするというのはどうかなと。親も子供と一緒に方言の勉強をする。そして、おばあちゃん、おじいちゃんから方言を教えてもらうというのはどうかなというのが 1 つの提案です。

それからもう 1 つ。皆さんカラオケにいらっしゃいますか。あるいは、お宅にカラオケがあったりとかするかもしれませんけれども、カラオケの替え歌、替え歌にして、島ユミタの大会をして、一番上手に歌った人、方言に翻訳できた人は、何かお米 1 升とか、10 キロとかあげるとか、何か親も一緒にやるのもいいかなと思うんですね。

親が「自分の子供は上手だ」と言いながら、自分が方言が分からないというんじゃないくて、親も一緒にやる。お父さん、お母さんも一緒に方言を勉強する。子供たちはそれを見て、自分たちもやろうと思うんですね。そういうのはどうかなと思うんです。

親子三代で方言の芝居をやる。お父さんの主張、お母さんの主張を方言でやる。そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんからも教えてもらうのは、いいんじゃないかなと思うんです。

(司会) そうすると、おそらく小さい子の方が言語習得が早いですから、子供さんの方が方言がうまくなって、お母さん、下手くそとかいうことが起きるかもしれませんね (笑)。ちょうど今、子育てをしている世代の方は、標準語教育で、方言はだめだという厳しい教育を受けて、それで、何か方言はだめだという価値観が頭にこびり付いているんじゃないかという気がします。

今はだんだん風向きが少し変わり、「方言もいいですよ」というふうになってきましたけれども、その前が、方言は価値が低いというような感覚を植え付けられた時代でした。しかし、そうじゃなくて、方言は価値があるということを、パネリストのみなさん、申し上げたと思うんですが、そういう価値観をどんどん払って、若い人にも価値観の転換をしていただきたいと思います。それには、確かに親子三代でカラオケ大会というのがいいかもしれませんね。

(司会) それから、ほかに何か。フランスでは、学校で、方言でやる授業があるんですね。

(トマ) すべての授業を方言でやるのです。

(司会) すべてを？

(トマ) はい。それで、よく心配されるのは、それで子供が標準語を覚えられないのではないかということなのですが、そんなことまったくないです。完全に両方使えるようになります。標準語も、その土地でしか使われていない言葉も、両方完全にマスターしたバイリンガルになります。そのための学校もあります。

(司会) そうですか。すべてですか。私は1時間か2時間かと思いました。それは素晴らしいですね。喜界だとか奄美では、方言を教えらる先生がいないんですよ。それで、島ユミタ大会なんかも、地元のお年寄りの方に学校に来ていただいて、そういう方が教えているそうです。ちょうど学校の先生の世代がもう方言を使えない世代だということがあるので、まず、学校の先生の世代の方言教育が必要かもしれませんね。

若い方言研究者の活躍

(松本) 方言が低く見られていたということと関連して、方言研究も低く見られているといったことがあります。それで大変いろいろと、だから大小の迷惑を掛けるという人もいます。名前は出しませんが、大学の教員の選考などで一方は『源氏物語』を、また片方は琉球方言だなんていうときに、やっぱり『源氏物語』のかたが採用されてしまうと、そういうことがあつたりすると、方言のかたは割を食うわけですね。

それから、あとこれは私がやはり国内研修で近くの大学に来ておりましたときに、教育学部の先生には、学部の学生が卒論で方言のことをやるのを喜ばない先生がいるんだと聞きました。こういうのはぜひ改まってほしいと思うんですけども、やっぱり方言研究が広がって、方言研究よりももっと高級と見られていたところから、わざわざ方言研究の方にいらっしゃったりする方もおられますから、これからはだんだんそういう偏見というか誤解というか、ゆがんだ見方はなくなっていくんだろうと思います。

そういうことと一緒に、この方言を皆さんがこれから伝えていくことをぜひ考えてほしいんですけども、喜界島が過疎化なんかしたら困るわけですね。人間がいなくて、方言がある、ないは意味がなくなりますので、私は、先ほど大朝戸の方言を斎藤兼雄さんという東京に出ていらっしゃっている方から教わったんですけども、もっといろいろな人から聞きたいですねと言ったら、「いや、松本さん、チニエービチエー（チニエの血筋の人は）サンサム ヲウラー（いくらもない）」と、人数が少ないとおっしゃっていました。

そういうのが高じて、「キカインチュヤ サンサム ヲウラン」ということになったら、これでは研究ができなくなりますから、ぜひ過疎を食い止めて、島の人口が増えて、方言を話すことに、潜在的なパワーが付くようにしていただきたいと思います。

（司会）新永さんはまだこれから職に就くわけですから、やっぱり方言研究者がもっと活躍できる場を、大学でもそうだし、地域でもできればあればいいですね。何か就職に向けて、抱負を。

（新永）抱負ですか？

（司会）抱負じゃなくてもいいですけど……。確かに松本先生がおっしゃったように、こういうフィールド調査をする方言研究者の数自体が少ないんですよ、日本は。世界もそうなのかもしれません。だから、もっと言語をやる人がフィールドに、地域に出て、実際の言葉を聞くということをやってほしい、またそういう場で活躍できる若手、これから有望な若手ですから、そういう人が増えてほしいなと私も思っています。その点、どうですか。

（新永）確かに言語学の研究をするときに、やっぱりみんな珍しい海外の言語を研究したがるというのがあるんですね。ところで、皆さんも「英語」とか聞くと、やっぱり英語には英語のちゃんとしたルールがあり、日本語の標準語にも、よく学校で国語の教科書から国文法を習いますが、ちゃんとしたルールがあるというふうに思ってますか？一方で、方言にはそういうちゃんとしたルールがないと思っているのではないのでしょうか。申し訳ないことですが、私自身もかつて大学に入るまでは、方言というのは何かしら標準語とは違う、標準語から崩れしまった、言い換えれば「訛っている」というふうに思っていました。

だけど、大学に入りまして、言語学を学び、その言語学の知識で方言をじっくり見ると、あっ、方言というの、英語とか中国語とか日本語の標準語とか、そういうほかの言語と同じように、1つのルールがある、文法書が書けるようになる、そういうすごくきれいな言語なんだと気付いたんです。「方言」という言い方をするか、「言語」という言い方をするかというのはあんまり重要な問題じゃなくて、その言葉にちゃんとした規則があるかどうかというのを見れば、いわゆる方言も標準語もほとんど変わらないんですね。どちらにも、ちゃんとしたルール、難しく言えば「文法」がある。

例えば先ほどちらっと言いましたけど、「私」を表す「ワン」という言葉が、「私は」の場合には「ワノー」となりますね。これは、ほかの場合ですと、例えば「酒は」なら「セーヤ」というように、「は」の部分は「ヤ」で表れますよね。「ヤ」というふうになるのに、何で「私は」のときは「ワンヤ」ではなくて、「ワノー」となるか、最初不思議だったんですが、調べて行くと、そこに一つの規則・ルールがあることに気付いたんです。例えば、じゃあ、「瓶は」はどう言いますかといったら、「ビノー」になる。つまり最後が「ン」で終わる言葉に対して「～は」と言おうとする場合、「ビンヤ」、「ワンヤ」とは言わずに、「ビノー」、「ワノー」と最後が伸びるようになる。これはすごくきれいなルールなんですね。

これは、英語やそのほかの言語が持っているルールなどと同じようなものです。つまり「方言は崩れている」「方言に規則・ルールはない」というのは嘘で、方言も研究すればそ

ここにきれいなルールや体系がある。つまり、方言もすごく研究のしがいのある言葉なんですね。

なので、これから大学に入って来る未来の若手の研究者たちも、方言も1つの言葉、言語なんだ、きれいなルールがあるんだということを理解していけば、もっと研究者は増えると思います。僕は方言をそのように考えていますし、後輩などにもそのようなことを伝えていきたいと思っています。

(司会) ありがとうございます。あとよろしいですか。

(トマ) 方言研究が低く見られて、方言自体が汚いとか崩れていると思われているとさっきお話がありました。僕はまったくそれはないと思って、海外にいる時松本先生や狩俣先生や木部先生の論文を読んで、喜界島や沖縄にすごく面白い言葉があるというのを知って、これはぜひ研究したいと思って調べに来ました。間違いなく、喜界島の方言は非常にしっかりしていて、大変興味深い言葉です。

(松本) お気付かだと思いますけども、今回の我々の調査メンバーは若い人がとても多くて、今、私が話したようなことがいい方向で進んでいくことの表れだろうという気がします。トマさんの発言も、そういう中で、本当にそれをちゃんと示してくれたというような気がして、私はたぶん今回の調査の中では一番高齢者だと思うんですけども、大変うれしい感じがします。これは、木部さんにまたお話ししていただいた方がいいと思うんですけども。

(司会) 私は、1人で来る調査も大変いいと思うんですけども、みんなで一緒に調査に来たいと最初に申し上げました。そのときに、ぜひ、若い人を連れてきたかったですね。それで募ったら、若い人のほうが多くて、若い人といっても、どこで線を引くかですけども、半分以上はまだ40歳以下、30代とか、20代になりました。実はまだ来たいという人がいたんですが、これ以上増えたら私はとても体が持たないと思って、だいぶお断りしました。

しかも今回、私たちは若い人にずいぶん刺激されました。若い人のバイタリティーもそうですし、若い人はすごく勉強しているなと思って、刺激を受けました。やっぱり、こういうことをやってよかったなと思います。

喜界島でも、昔から世代を超えて宴会をしたり会をしたりするというのが島のやり方だったと思うんですね。東京みたいに、子供はあっちに行っていないさい、ここは大人の世界、とかじゃなくて、大人も子供も一緒に会に参加するという雰囲気がいいなど、私は島に来るたびに思うんです。

ぜひ、そこでは共通語禁止、標準語禁止、方言でしゃべる、というようなことをしていただきたい。分からなくても、とにかく子供に聞いてもらうというのが大事ですから。普通は、お孫さんに方言をしゃべると通じないから、孫には共通語で話すんだという方が多いんですね。日本中どこでもそうです。確かにお孫さんはかわいいし、お孫さんと会話したいでしょうけども、孫が分からなくても、とにかく方言でしゃべる。方言で語り掛けないと、おやつをあげないとか、おもちゃを買ってあげないとか、ぜひそれぐらいの強い気持ちで臨んでいただければと思います。

島のことばに自信を持とう

(司会) 狩俣さん、最後に何かありますか。

(狩俣) 僕は英語が話せなくて、ヤマトユミタしか知らないんです。そういう言葉を一つしか知らない人をモノリンガルというんですね。英語とヤマトユミタが話せるとバイリンガルなんです。ここにいる人のほとんどは、島ユミタとヤマトユミタの二つ話せるバイリンガルです。子供たちをまずヤマトユミタと島ユミタを話せるバイリンガルにする。中学校に行ったら英語を勉強して、英語と三つの言葉を話せるようにする。そうすると、どこに行っても大丈夫です。

うちの学生がアメリカに行ったりイギリスに行ったりフランスに行ったりします。留学先で沖縄にはどんな歌がありますか、沖縄ではどんな料理を食べますか、沖縄の歴史はどうなっていますか、沖縄にはどんな文化がありますかと聞かれる。でも、答えられない。ところが、よその国から来ている学生たちは、自分の故郷にはこんな歌があつて、こんな歴史があつて、こんな文化があつて、こういう料理を作っていると一生懸命語るんだそうです。

自分の生まれ育った土地の言葉も文化も歴史も知らない人は、海外に行って自信を持って自分を語る事ができないんです。だから、島の言葉や島の文化を教えるのは、狭い人間を育てるのではなくて、都会に行っても外国に行っても、どこにいても自分のことを自信を持って語る、そういう若い人を育てることなんです。方言を教えるから、狭い世界に閉じ込めるんじゃなくて、木部先生が言ったみたいに、どこに行っても、自分は喜界島の出身だと自信を持って語れる、子供たちのため、子供たちの教育のためだと思って、方言で語りかけることが必要なんです。

昔は、ヤマトユミタにするか島ユミタにするか、あれかこれかの二者択一でした。しかし、今はあれもこれも。二つの言葉を話せるのがいいんです。一つの言葉をしか話せないよりも二つの言葉を話せるのがいい。二つの言葉を話せるよりも三つの言葉を話せるのがいい。これからの喜界島の子供には言葉を三つ話せる、四つ話せるようにする。そんな教育を今日ここに来ている人たちが始めれば、海外で活躍できる喜界島の人が出てくる。ああ、テレビに出ているこの人は国連で活躍しているけど、喜界島の出身で、島ユミタも上手だ。そういう若者を育てるようにするのがいいんじゃないかなと思うんです。

トマさんはフランスから来ていますし、先に帰ったローレンス・ウエインさんはニュージーランドからきていますが、喜界島の言葉は外国の人にまで興味を持たれている言葉だと、自信を持って子供たちに教えてほしいと思います。

(司会) どうもありがとうございました。もうそろそろ時間ですので、この辺で閉めたいと思います。もし何かご質問があれば、5分ぐらいお答えできればお答えしたいと思います。どうぞ。

会場からの質問

(QQ) どうも、貴重なお話をありがとうございました。狩俣先生のお話をお伺いして興味を持ったんですけども、つまり沖縄と喜界島は共通点があると。つまり、「目」が「ミー」と。松本先生がおっしゃった岩倉市郎先生の『喜界島方言集』、町の図書館にありますけれども、その中に、喜界島の母音は「ア」、「イ」、「ウ」の3つで、「エ」が「イ」に、「オ」が「ウ」になっているとか、トマ先生もおっしゃっていた、「イモ」が（喜界）島では「ウム」、『万葉集』は「ウモ」となっていると、「モ」が「ウ」になっていると思うんですね。

そこで、狩俣先生にお伺いしたいのは、沖縄でも母音は3つなのかどうか。「目」が「ミー」となるとおっしゃっていたので、ひょっとすると、喜界島と同じように母音が「ア」、「イ」、「ウ」の3つなのかなとふと思ったんですが、その辺をちょっと。

(狩俣) 沖縄も、「イモ」は「ウム」と言うところがありますので、「オ」は「ウ」になりますね。「言葉」を「クトゥバ」、「事」を「クトゥ」と言うので、母音「オ」が「ウ」になるのも同じです。「目」は「ミー」、「手」は「ティー」というふうに、「エ」という母音が「イ」に変わります。

ただし、3母音だけではなくて、「前」のことは「メー」と言います。「ハエ」のことは「フェー」とか「ペー」とか言います。喜界島にも「エ」という母音もあります。さっき新永さんが言っていた「私は」というのを「ワノ」といって、「オ」という母音もあります。

「ア」、「イ」、「ウ」の3母音だけではなくて、「エー」という母音も「オー」という母音も喜界島にもあります。それは沖縄でも同じで、「前」のことは「メー」と言います。「灰」は「フェー」とか「へー」とか「ペー」とかといいますので、沖縄の言葉も同じです。母音の数とか子音の数とか、喜界島の言葉と沖縄の言葉は、よく似ています。

(松本) ちょっと付け足しますけれども、沖縄の言語と似ているとともに、喜界島の言葉は、隣の奄美大島ともやはり共通点がある、その点で、両方の結び目みたいところがあって、そこを解き明かすのが面白いところなんです。「取ろう」というのは、「何かを取ろう」といったときに、「トゥロー」という言い方は大島式の言い方ですが、それだけじゃなくて、「トゥラ」という形があります。あと、「取るだろう」というのの古い言い方で、「トゥユロー」という形のほかに「トゥユラ」という形があります。片方は奄美大島と共通で、片方は沖永良部、与論から沖縄本島と共通の形です。

この2つが一緒になっているというのは、例えば奄美大島式の言い方があったところに、沖縄からの力が入って、それが拮抗して、2つの形が保存されている。この島は大変、形を大事にしまして、2つあったらば、どちらか片っぽをなくしちゃうというんじゃなくて、何か微妙な使い分けをして、2つを保存しておくという姿勢があって、奄美大島式の形と沖縄本島式の形が共存しているんですね。

そういうふうな気持ちというのがずっとあるらしくて、例えば今日も教わってましたら、「ハサ」と言うんですか、「傘」は「ハサ」と「カサ」と2つあって、かぶり傘と、それから差し傘とを区別するという。これもやっぱり1つだけにして一緒にしないで、せつ

かく2つあるんだから、どっちも使おうというような精神。これは、もしかしたら大島本島式の言い方、それから沖縄式の言い方、それ両方を共存させたときに身に付いた心というようなものが、ずっと今でも伝わっているのかななんて思って、聞いていました。

(QQ) 私は4点ほどお聞きしたいんですけども、まず1点は、狩俣先生が後の方でコメントなさいました言語をいろいろ知っておくといいんじゃないかというようなことだったんですが、若干、グローバリゼーションに頭を突っ込んだような形になるんじゃないかなと思って、今、お話を伺って、今日、先生方がなさったのは、喜界島の方言についてやっていたらしゃる。だけれども、ほかの言語を知るということは、また喜界島の方言が薄められていく面が出てくるんじゃないかなという不安が私は今、湧いてきました。それが1点ですね。

それから、歴史のことなんですけれども、喜界島には喜界島ももとの歴史があります。その後、オキナワユー、ウチナーユーというのがあります。その次にヤマトユーがあって、アメリカユーがあって、今はヤマトユーになっているわけですね。そういう風な歴史の中で、先ほどいろいろご指摘くださいました方言の発音の違いなど、表現の違いなどが関連しているところが出てくるんじゃないかなという、私は疑問が出てきたんですけども。

それから、危機の問題ですが、私は高校の教員をしていました。それで、(奄美)本島に來ましてから、私は(奄美)本島の出身で、小学校はここで卒業しました。あと中学校、高校を沖縄で過ごしたんですけども、その中で、20年ぐらい前に本校へ転勤してまいりまして、そこで生徒と教員とのいざこざが非常に強く本土でも聞きました。鹿児島からみえた先生方が九十数パーセントですね。私どもが幼かったころは、昭和30年代までは地元の先生方が多かったんですけども、その後、本土への復帰後、交流がありまして、鹿児島からみえた方々は、鹿児島弁で子供をしかるわけですね。子供は分からないわけです。そうすると、今度は舌打ちみたいにして、島ユミタで反抗するわけですね。そうすると、ますます教員は怒って、厳しく生徒に当たったということがあって、学校では方言を使わせないようにするということがあったようです。

それ以前は、要するに共通語を使えと。私も小学校のときに方言札を首に掛けられた方なんですけれども、そういうこともありました。それで、そういうこともあって、ある意味では、その制度の中で、やっぱり方言が人間の交わりを押さえ付けてきている面が出てきておったんじゃないかというふうなことです。沖縄におるときには、お前は方言を分かんのだというふうなことを言われて、奄美から行っているものですから、そういう誹りも受けました。

それからもう1つは、方言研究の、あるいは方言のレベルの低さというご発言もあったんですが、それは、先ほど申しました教員と生徒とのいざこざですね、沖縄で、私はちょうど昭和33年の高校卒業ですから、その昭和20年、昭和30年前後の間で聞いたことなんですけれども、私の剣道の先生に、巡查をしていらっしゃる方がいらっしやいまして、その方の話ですと、そういう方々は地元の人ですからよかったんですが、本土からみえた方々は、結局、そのころは政府が任命する役人ですから、その役人には沖縄の標準語が話

せる通訳が付いておったと、というような話も聞いたわけですね。

ということは、やっぱり統治されているという中で、方言が低く扱われてきたんじゃないかなというようなことも、今、狩俣先生のお話を聞く中で、思いを呼び起こしているところですよ。もしそういうふうなことが先生方のお役に立てればと思うところです。どうもありがとうございました。

(司会) 今のご質問は、ご意見としてうけたまわりたいと思います。

(QQ) (質問は) 一番最初のほうの狩俣先生へのですね。レベルの問題、それから危機の問題、それについて、ご研究の中でどう今後、展望が持てるのか。私どももやっぱり地元において方言をいろいろと先生方のお手伝いをできるところもあるだろうと思いますので、その中で、今後、私どもがどう動けばいいのかというふうなことも出てくると思いますので、急にはできないと思いますけれども、よろしくお願いします。

(狩俣) 言葉を、方言も標準語もやっていくと、もう一方がだめになるんじゃないかなという話なんですけど、実は人間の脳はそんなに小さくなくて、4カ国語でも5カ国語でもきちっと話せるんです。それはこちらにいらっしゃる方々が、標準語でも話せるし、方言でも話せるわけですよ。教育長さんも上手に標準語でもあいさつなさいますし、方言でもあいさつなさいます。

こちらができる、あちらができなくなるというのは昔の考えで、今は言葉は2つ、3つと覚えられるといわれています。2つ覚えられた人は3つ目が早い、3つ覚えた人は4つ目が早いというのがあるんです。マルチリンガル化と言われていて、たくさん言葉を覚えていくのがこれからの世の中なんです。ですから、1つの言葉しか話せないよりも、2つの言葉を話せるようになるのが重要なんです。

昔は、あれかこれか、共通語か方言か。方言はだめだから共通語にしなさいでしたが、今は共通語も話せるようにするし、方言も話せるようにする。そして英語も。できれば、これからは中国が経済発展していきますから、中国語もできた方がいい。というように、たくさん言葉を子供たちに教える時代になっているんですね。

文部科学省もそう言っていて、学習指導要領なども変わってきていて、方言も教えていいですよというふうに変ってきています。ようやくこの20年ぐらい、文部科学省の指導要領も子供たちに地元の文化や言葉を教えてくださいというふうに変ってきているんです。

言葉を1つしかしゃべれない人は、脳をちょっとしか使っていない。言葉を2つしゃべれる人は、もう少し使っている、3つしゃべれる人はたくさん使っていると思った方がいいと思います。だいたいトマさんが英語もフランス語も日本語もしゃべれる人で。

(司会) 宮古語も。

(狩俣) はい、宮古語も(笑)。宮古島の方言もしゃべれます。そういう人が優秀な人なわけですね。土地の言葉を大切にするというのは、グローバルであり、かつローカルです。それが1人の人間に共存するということです。社会もそういうふうに変ってきています。

(司会) やっぱり大切なのは、多様であるということに価値があるという、そういう価値観に転換していくことだと思います。1つのことだけじゃない。今は国もそうですし、世界全体が、多様であることに価値があるというふうにだんだん変わってきました。昔の、1つのものしか価値を認めないという考え方も変わってきました。学校現場もそういう考え方を取り入れて欲しいですし、もう取り入れつつあると思います。

(Q Q) 今日は我々のふるさとに来ていただいて、ありがとうございました。2点ほど伺います。中国語、それから沖縄語、それから日本語と関係があるというのは、非常にそれは当然のこととして分かりやすいんですが、先ほどちらっと出てきましたけど、沖縄から北海道に至るまで、あちこちにアイヌ語の影があるわけですね。私の持っているわずかばかりの資料でも、非常にアイヌ語と関係があると。

木部先生も含めて、例えば北海道のアイヌの集落にお入りになって、聞き取りなどをなさっている先生がいらっしゃいましたら、そこで、この奄美とか沖縄で、これはまさしくアイヌ(語)だというものが、もしこういうのがあるよというのがあったら教えていただきたいということが1つ。

第2点は、今日はトマ先生もいらっしゃいますけど、ウラル・アルタイ語とインド・ヨーロッパ語族の中、これはあんまり厳密には分類されてないけど、この2つの流れの中で、我々のこの島の言葉というのは、それらの中のどの辺とかかわりがあるのか、どちら側に入っているのかという、この2点をお聞きしたいです。

(司会) 非常に大きなテーマですね。アイヌ語の話をどなたか……。

(狩俣) 松本先生はアイヌ語との話をしましたが、縄文時代のころの言葉がもし日本中にあったとすると、その方言は今ではまるで外国語のように、どこの国の言葉か分からないぐらい違ってははずなんです。沖縄の方言も喜界島の方言もよく似ているんですね。「目」を「ミー」というような共通点があります。もし仮にアイヌ語と共通のものが残っていたとしても、痕跡のようにわずかに残っているだけなんだろうと思います。

喜界では「坂道」を何と言うんですかね。「ヒラ」「ピラ」ですね。アイヌ語では「がけ」のことを「ピラ」と言うんです。私は1回だけアイヌ語地名の調査で秋田に行ったことがあるんですが、アイヌ語地名の「ピラ」を聞いてびっくりしました。沖縄の方言では、上り坂は「ヒラ」、下り坂は「サカ」と言うんです。だから「ピラ」も「ヒラ」も日本語にもともとあって、それがアイヌ語と沖縄の方言に残っているのかもしれない。

今はアイヌの人たちは北海道にいるんですが、太平洋側では関東平野のちょっと北ぐらいまで、日本海側では新潟県の阿賀野川の北までアイヌ語地名があったようです。本州の半分に住んでいた人たちの言葉になります。弥生が始まって、日本中に弥生文化が広がる前ぐらいまでは、本州の半分にアイヌ人系の蝦夷が住んでいたと考えられるわけで、日本語の中にその痕跡があるだろうとは思いますが、確実な証拠を見つけることは難しいです。もしアイヌ語と琉球語の共通性があるとしても、日本語を飛ばして言語学的に厳密に共通性を見つけるのはすごく大変です。可能性は否定はしませんが、証明するのは

大変だろうと思います。もう1点はトマさんに。

(トマ) ちなみに「ヒラ」についてなのですが、『古事記』に「黄泉平坂(ヨモツクニノヒラサカ)」という言葉があつて、「平たい坂」とは何だろうとずっと不思議に思っていました。それで、初めて奄美と沖縄に来て、「黄泉平坂」の「ヒラ」は「平たい」ではなく「坂道」という意味だとやっと分かりました。

次に言葉の起源ですが、どこから来たかという問題ですね。やはり奄美・沖縄の言葉は日本語と兄弟の関係にあります。どう見ても文法も単語も非常に似ていて、起源が同じです。それがまた世界のどこの言葉と関係があるのかという問題は非常に難しいですが、朝鮮語と関係があるのではないかとよく言われます。しかし、それを証明するのは非常に難しく、今までの説にはそれほど強い根拠はないです。それに古代の日本と朝鮮半島の間には交流があつたので、言葉の借用もあつたでしょう。だから起源はもしかして別かかもしれません。その可能性の方が高いと思います。

またほかの言葉を見ても、見た目は似ていますが、よく見ると中身がかなり違ってきます。ほかの研究者に伺ったところ、日本語と奄美・沖縄の言葉の起源は、現在のところはまだ不明だそうです。

(司会) じゃあ、もう時間も過ぎましたので、以上でシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(進行) いろいろな角度からご提言、ご享受ありがとうございました。

それでは、最後に閉会のあいさつを、本町の文化協会長がいたします。よろしく願います。

(文化協会長) 皆さん、本日はお疲れさまでした。予定の時間を30分ほど過ぎております。でも、まだまだいろいろと質問もされたい方も多く、またこれほど関心の高い、パネリストの方、そしてまた司会をされた木部先生、本当にありがとうございました。

実は私、教育長の先生が先ほどごあいさつで皆様にご紹介しました鹿児島地域文化創造事業、この本を作るのに、喜界町ブロックのブロック長として参加させていただきました。この本は、各学校、それから図書館等にございます。喜界島の子供たち、奄美の子供たちに少しでも方言に親しんでいただこうということで、大変、子供たちが親しみやすい中身になっております。そして各島々の特徴ある島唄、それから先ほど狩俣先生がおっしゃってくださいました替え歌ですね、皆さんが普段歌っている歌を替え歌として子供たちに歌ってもらって、方言をより近いものとして子供たちに方言を使っていってもらおうということで、このような本ができております。本当に狩俣先生、それから木部先生には、そのときにいっぱいお世話になりました。

そして、また今回、木部先生をはじめ各学校の先生方、総勢三十何名、大学の先生方が来てくださっております。本当にこのように喜界島から手始めに、奄美の言葉、消えゆく言葉であります、この言葉を残そうと一生懸命してくださっております。どうか地元の我々

も一生懸命取り組んで、子供たちに何とか方言を残して伝えていくように努力したいと思っております。

そしてまた、私ども文化協会、大島郡の文化協会でもいろいろな取り組みをしております。与論町では、方言を使うということを条例化しようということで条例を制定しております。文化協会としても、いろいろな形で何とか努力はしておりますが、やっぱりこれは大変難しいことで、地元の皆さんが子供たちにしっかり伝えていかないとならないことだと思っております。

どうか今後とも喜界町の方言、そしてまた奄美の方言を皆さんでしっかり支えていただきたいと思えます。簡単ではありますが、閉会のあいさつとさせていただきます。本日はお疲れさまでした。(拍手)

(進行) ありがとうございました。調査団一行の今後のご活躍と感謝の気持ちと同時に、喜界町との一層のご指導をお願い申し上げたいと思えます。その意味を込めて、大きな拍手をお願いします。(拍手)

それでは、発表講演会に参加された皆さん、大変お疲れさまでした。お帰りは気を付けてください。以上で成果講演会を終了します。お疲れさまでした。ありがとうございました。